

## コクトーと日本の芸術家達

### ——ジャン・コクトーの日本訪問（5）

西川正也

昭和11（1936）年5月、世界一周旅行の途中で日本を訪問したジャン・コクトーは、歌舞伎や相撲見物、ラジオ番組への出演などのために多忙な毎日を経験することとなった。画家の藤田嗣治がこの旧知のフランス詩人を吉原や玉の井の歓楽街へと誘い出したのは、そんなコクトーの精神的な疲労を和らげようという意図があったのかもしれない。コクトー自身も彼の旅行記の中でこの歓楽街の探訪について詳述しているが、その経緯に関してはすでに拙稿「コクトーと藤田嗣治」<sup>1)</sup>の中で触れたので、ここでは繰り返さない。

そして「八十日間世界一周」と題されたコクトーの旅行記の中で「玉の井」訪問の記述の後に続くのは、こんな一節であった。

若い詩人達の代表のことも、若い画家達や、官展派の画家達のそれについても、私はここでは書かない。パスパルトゥ（引用者註：コクトーの秘書マルセル・キルを指す）の旅行ケースは、ニッポン語の私の著書や、箱を収めた箱をさらに収めた箱や、筆入れや、中国のインク棒（同註：墨のこと）や筆や画帳で一杯になる。<sup>2)</sup>

ごく簡単なこの一節を読むかぎりでは、コクトーは日本の詩人や画家達にはそれほどの関心を持たなかったように感じられるかもしれない。しかし、本当にそう断言することはできるのだろうか。この稿は、彼の旅行記の中では描かれなかった、したがって今日ではほとんど知られることのなくなったコクトーと日本の芸術家達との出会いと、彼ら日本の芸術家達にとってのコクトーの意味、という二つの問題について、その一端を明らかにすることを目的としてまとめられたものである。

#### 1 コクトーに接した文学者達

来日したコクトーと最も長く、また最も親しく接した日本人は、間違いなく詩人の堀口大學（1892 - 1981）であった。自身の随筆の中でも「五日の間、殆んど絶えず一緒に暮した」<sup>3)</sup>と書いているとおり、堀口は宿泊先の帝国ホテルに泊まりこんで通訳兼案内役としてコクトーと行動を共にし、このフランス詩人が日本の真の姿を見定めようとする過程で惜

しみのない助力を与え続けたのである。外交官の父とベルギー人の義母とに連れられて世界の各地で暮らした堀口が自国の文化に向き合う時の姿勢は、必ずしも日本で生まれ育った人達と同じではなかったかもしれない。しかし日本や日本人を外から眺めた経験のある堀口だからこそ、より効果的な形でコクトーに日本の姿を示すことができたという面もあったのではないだろうか。東京での最初の訪問地として明治神宮を選び、歌舞伎や相撲見物の際には詳細な解説を行なってコクトーの理解を助けたのは、みなこの堀口であった。

フランスではほとんどの時間を自宅にこもって過ごしていたという詩人を、昼夜を問わず様々な場所へと連れ出そうとする堀口に対してコクトーは「君は僕に不可能なことをさせる」<sup>4)</sup>と言って嘆いたというが、もし堀口という案内者がいなければ、おそらくコクトーの日本理解はずっと表面的なものに終わっていたに違いがなかった。コクトーの旅行記の中では「Nico (ニコ)」という愛称で紹介されている堀口の印象はそれほど強いものではないが、コクトーの日本における体験の重要な部分が、実はその堀口の導きによってなされたものであったことを忘れてはならないだろう。

そしてもちろん、この来日の遙か以前からコクトー作品の紹介と翻訳とに取り組み続けてきた堀口にとっても、彼とともに過ごした数日間は生涯の間、忘れることのできないものとなった。以降、堀口はコクトーの死に至るまで繰り返しこのフランス詩人との思い出を書き綴っているが、堀口の残したそれらの文章はコクトーその人に対する深い愛着や、文学の同志へと向けられた共感とでもいふべき感情に彩られたものとなっている。

コクトーが形見にくれた<sup>たてごと</sup>豎琴が  
 エールフランス機でパリから来たが  
 そもそもこれが その昔  
 トラス生れの魔法使  
 詩人オルフェが愛用の名器だそうで  
 弦は<sup>げん</sup>羊腸<sup>ようちよう</sup> 木部は<sup>もくぶ</sup>月桂樹  
 台座は<sup>たいまい</sup>玳瑁の甲羅のつくり  
 死の直前の走り書き  
 コクトーの添え状には  
 <由緒ある名器に恥じぬうわごとを！>  
 と 二行に分けて書いてあり  
 うわごとというところには  
 特にアンダーラインがしてあつた

夢介の見た初夢は  
 きのうに続くあすのこと  
 夢とも言えぬ<sup>じつ</sup>実のこと

(「夢介のあすの夢」より) 5)

堀口は随筆だけではなく、「コクトー」を題材とした詩作品も数多く残しているが、コクトーの死後に書かれたこの作品などは彼に対する堀口の「同志」愛を端的に表した一篇と言えるだろう。

日本におけるコクトーの最初の、そして最も熱烈な紹介者はこの堀口大學であったが、来日に先立つ時期に堀口に劣らぬほどに精力的にコクトーの紹介に当たっていた文学者には、他に堀辰雄と佐藤朔があった。堀辰雄については後述することとして、では佐藤朔の方は来日したコクトーとどのように関わっていたのであろうか。

フランス文学者であり詩人でもあった佐藤朔（1905 - 1996）が盛んにコクトーに関する文章を発表しはじめるのは、堀口が訳詩集『月下の一群』（大正 14 年）の発表によってコクトーの名を新世代の文学青年達の間を広めてから、ほどない頃のことであった。

私（註：佐藤）がコクトーの作品に親しみ初めたのは、昭和二年ごろで、まず詩集と評論とを読み、そのいくつかを翻訳までしている。それは、『雄鶏とアルルカン』『職業の秘密』『無秩序と考えられた秩序について』などで、いずれもコクトーが一九二〇年前後に書いたエッセーで、これを手掛りに、彼の芸術論を探り、同時に一九二〇年代の新しいフランス文学の動向を探ろうとしていた。6)

こうしたコクトー研究の成果として、佐藤は昭和 2 年発行の雑誌「文藝耽美」および昭和 3 年発行の「詩と詩論」に「コクトオ論」7)を発表するのだが、これらはコクトーに関するおそらく日本で最初の体系的な論考であるばかりではなく、コクトーの作品を彼の生涯に沿って解説していくその内容は今日でも十分に読み応えのあるものとなっている。

そして、それ以降も翻訳に、評論にと、積極的にこの詩人の紹介を続けていた佐藤にとっては、コクトーの来日は本人と直接言葉を交わすことのできる、またとない機会であったに違いない。東京に到着したばかりのコクトーの一行に加わって明治神宮に赴いた佐藤は、鳥居に鼻を押し当てて「千年の香りがする」と匂いをかいでみせるフランス詩人の姿にまず驚かされた、と後に語っているが、佐藤とコクトーとの対面はもちろんこの一度だけではなかった。

戦前に、コクトーが世界一周したとき、日本に立ち寄って、相撲見物の記事を書いている。それがまことに精彩を放った文章で、異国の古典的スポーツを初めて見て、よくあれだけの確に書けるものだ后感心したものだ。もっともあのときは藤田嗣治と堀口大學という最高の説明役が附いていたから、コクトーが相撲の見どころをちゃんと捉えることが出来たのであろう。（中略）

僕はあのときコクトーと国技館へ同行しなかったけれど、その翌日か明治神宮と上野

の博物館へ一緒に行ったことを覚えている。あれはコクトーが四十七歳の頃で、スペイン戦争の最中だった。(後略) 8)

前後の日程については必ずしも正確とは言えないが、コクトーの来日に関して佐藤が残した数少ない証言の一つであるこの文章を読むと、佐藤は彼とともに明治神宮のほか、上野の博物館にも出かけたことがわかる。神宮訪問から数日の後、ちょうど上野で開かれていた絵画展へと向かう車内には佐藤とコクトーの他に堀口大學が乗り合わせていたが、彼らの間で交わされた会話については堀口が次のように書き記している。

上野の南画展へ行く途中の自動車の中で、同行の佐藤朔君が評論家であつて、すでに両度にわたつて重要な『コクトオ論』を書いてゐることを告げると、コクトオは、それをぜひ仏訳して送つてくれるやうにとつた。佐藤君が返事を躊躇してゐるのを見てコクトオが言ひ出した。

僕に関する限り、フランスでは、今までのくなく批評が一つ現れてゐない。それは党派や私怨や友情にさまたげられるからだ。何によらず、正当に批評するには、ある程度の時間の経過を必要とする。現代人が現代人を正当に批評することは不可能に近い。だから僕はフランスに現れる自分に対する批評は一つも読まない。(中略) 外国の批評家は比較的正しい。その理由は、先に僕が正当な批評をするに必要だと言つた時間の経過の代用を、ある程度まで距離がしてくれるからだ。いままで、僕に対して示された批評では独逸やアメリカの批評が一番正しい。必要な場合には、僕はもつぱら外国批評家の言を引用することにしてゐる。9)

文中にある「両度にわたる『コクトオ論』」とは、先に紹介した佐藤の二つの論考を指しているが、彼がそれらの論文をコクトーに頼まれたとおり仏訳して送ったのかどうかは実は明らかではない。様々な場所でコクトーとの思い出を書き綴っている堀口とは違って、佐藤はコクトーの来日に関する文章をそれほど多くは残していないからである。しかし佐藤の書いた論考をめぐってその後も車内で会話が続いたと想像することはそれほど困難ではないし、また少なくとも、それまでは書籍を通じてしか接することのできなかつたフランス詩人から直接「あなたの評論を読ませてくれ」と依頼された時の佐藤が、幾ばくかの困惑とともに大きな喜びをも感じていたことだけは確かであろう。

佐藤は後年、詩人としてよりも文芸評論家、フランス文学者として知られるようになり、昭和40年代には慶応義塾の塾長も勤めている10)。その生涯を通じて佐藤は何篇ものコクトー論を発表しているが、それらの論考はコクトー本人との会話によつてもたらされた作品についての知識や、その人となりに関する記憶によつて根底の部分でしっかりと支えられたものであったと考えても良いだろう。

来日したコクトーは、この佐藤や堀口の他にももちろん多くの人達と接している。東京でのコクトーは実際にその数さえわからないほどの人間に会ったらしいが、その中でも彼にとって最も印象的だったのは新しい世代の詩人達との会見であった、と堀口は書いている。

(前略)彼を一番よろこばせたのは、菊五郎の『鏡獅子』と、東京詩人クラブの若い詩人たち、近藤東、長田恒雄、北園克衛、山本和夫の諸子や、佐藤朔氏や江間章子氏などの、熱心な愛読者との、言葉より余計に心で語り合う〈会見〉だった。若い世代の人たちの歓迎が、身にしみて嬉しいその気持ちが、傍らで見ている僕にもありありと感じとられた。11)

近藤東や北園克衛らは「モダニズム」と呼ばれる昭和の新しい詩の潮流に身を投じていた詩人であり、当時四十代の半ばであったコクトーよりも十歳以上の年少であった(各詩人の略歴については註 11 を参照のこと)。そのうち、北園克衛は西脇順三郎らと並ぶシュルレアリスム運動の一員としても知られているが、日本における初期のシュルレアリスム詩は、フランス本国のシュルレアリスト達とならんでコクトーにも多大な影響を受けており、北園自身もある時期には自分の詩篇にコクトーへの献辞を書き添えたりしていたほどであった。

母国ではシュルレアリスト達とは犬猿の仲であり、時には彼らによる迫害さえも経験していたコクトーにとっては、遠い日本の地で「党派」の隔たりなく接してくれる若い詩人達の歓迎は大いに心を動かされるものであったに違いない。彼らの「会見」の詳細は残念ながら伝わっていないが「言葉より余計に心で語り合う」という堀口の表現からも、静かな興奮に包まれたその場の雰囲気を感じ取ることができるだろう。

本稿の冒頭に引用した旅行記ではコクトーは、彼ら、日本の新しい詩人達については、「若い詩人達の代表のことも(...)私はここでは書かない」という簡略な表現によって触れていたに過ぎない。しかし、年少の詩人達と語り合うコクトーの喜びがどれほどのものであったのかは、「若い世代の人たちの歓迎が、身にしみて嬉しいその気持ちが、傍らで見ている僕にもありありと感じとられた」という堀口の言葉によっても明らかである。

北園らによるコクトー論はこれまでのところ発見できていないが、当時の日本で最も知られていたと言ってもよい同時代のフランス詩人との会見が、彼らにどのような印象と影響とを与えることになったのかは今後の研究の重要な課題のひとつである。

滞京中のコクトーに接した文学者としてはこの他に何人かの名前が伝わっているが、その一人には、ともに歌舞伎を見物した作家の林芙美子(1903 - 1951)があった。コクトーの旅行記には「一人の若い女流詩人が文芸家協会長(註:菊池寛)からの花束を私に贈る」12)という記述が見られるが、花束の贈呈役として林が選ばれたのはおそらく彼女が以前

パリに滞在した際に、コクトーの製作した実験映画「詩人の血」を三度も見に出かけたほどのコクトー・ファンだったからであろう。

滞仏中の林の日記（昭和7年1月13日付）には「八時半、ビユウ・コロンビエにひとりで、ジャンコクトウのシネマを見に行く。『或詩人の血』とてもよかつた。白と黒とのたたかひだ、多分に東洋的であつた。一寸おそろしい映画だ、あんなのを見るといい小説が書きたくなる」13)という記述があり、さらに翌日、日本の友人に出した手紙では

昨夜、ジャンコクトウのつくつた映画を見に行つた。ビン・コロンビエと云つて、築地小劇場みたいな小さい小屋で、コクトウの声のはいつた『或詩人の血』と云ふのを見た。君に見せたい。まったく豊富な空想の世界あたらしいテクニクだ。14)

という絶賛に近い言葉を書き連ねている。林は二日後の1月16日にも再び知人と鑑賞に出かけ、その帰途にコクトーのレコードまで買い求めているくらいだから、この映画に対する彼女の熱中ぶりは自ずと明らかであろう。

全く強調しすぎる程の鮮やかな白と黒をつかひ、人間の肉体の美しさを見せ、聯想から聯想によつて、詩人の生涯を語り、観客を長い間呆然とさせて了ふ。筋のない映画はあるが、コクトオのねらつた為事の第一歩として、これは巴里の映画界の大きな収穫といはなければならない。カルチエ・ラタンの夜更けの街を、奇妙な昂奮にかられながら私は歩いた。

「巴里での一番愉快的収穫だつたのですよ。コクトオの映画は……」15)

これは日本の雑誌のために林が巴里から書き送った記事の一節であるが、市井に生きる日本人の姿を描き続けた『放浪記』の作家が、軽業師と呼ばれたパリの詩人の実験映画をこれほどまで好んでいたことは今日の読者にとってはむしろ意外なのではないだろうか。

そして、そんな林であってみれば、それから四年後のコクトーの来日に際して花束の贈呈役を与えられた時の興奮がどれほどのものであったのかは想像に難くない。

歌舞伎座で逢つたコクトオは桃色のカアネイションを胸にして、薄茶のレースのやうな手袋をしてみました。随分皺の深い顔をしてみました。人間離れのした瘦躯で、鶴のやうでした。百姓家の納屋あたりを飛ぶ雀のやうな不細工な私が、菊池先生のメッセエジと花束を持つてゆくことから、動悸がするし、病気になりさうでした。その夜の花束は私の背丈くらいもあつてとてもきれいでした。ピンクと白と緑、コクトオは私から花束を受けとつて、私と握手しましたけれど、驚いたことに、何と云ふ無気味な掌なのでせう。かさかさに乾いてみて、淋しい手でした。16)

コクトーの離日直後に発表されたこの文章では、洒脱な装いの詩人に対面した時の林の緊張ぶりとともに、彼から受けた最初の印象が記されている。遠くから見ると青年のようであったコクトーも、近くで接すると旅の疲れが顔に表れ、その華奢な手は驚くほどに乾いて淋しいものであったというのである。「私は何気なく、この詩人は風葬が一番似合ひさうだと、そんな変なことを感じた。花束を渡す私の手を握手したコクトーの感触は、何か乾いた感じで、秘書のキール氏の手には柔さにくらべて、物を書く人の手は、人種を越えて、誰の手もこんなに乾いてゐるのではないのかしらと、いつまでもそんなことを考へてみた。」<sup>17)</sup>これは林が別の雑誌に発表した「コクトーに会ふ」と題する文の一節であるが、「淋しい手」や「風葬が似合」うといった強い表現を使ってしまうほどにコクトーの手の乾いた感触は印象深いものだったのであろう。

コクトーとの最初の挨拶を終えた林はこの後、彼と並んで六代目菊五郎の「鏡獅子」と「十六夜清心」とを見物することになる。「へとへとに疲れた」と嘆きながらも絶え間なく喋り続ける詩人の言葉を堀口の通訳で聞きながら<sup>18)</sup>、彼女の方からはほとんど話ができなかったと林は書き記しているが、やはり彼女は、コクトーが隣にいると考へただけで何を話していいのかもわからなくなくなるほどに緊張していたのであろうか。幕間に廊下に出るとたちまち人に取り囲まれてしまう詩人の横で時間を持て余している秘書のマルセル・キルと、林は日本語、キルはフランス語のままで、日本の印象やフランスの思い出などについてたっぴりと会話を楽しんだとも書かれているから、相手がコクトーでなければそんな林の緊張も解けて、随分と舌も滑らかになったようである。

この後、一行とともに菊五郎の楽屋を訪れた林は、最後に歌舞伎座の出口でコクトーを見送ることになるのだが、彼女はその時の様子をこんなふうに記している。

歌舞伎座の前で、コクトーの自動車を見送つた時、コクトーは皆さんのいらつしやる前で、私の手を取り、接吻するのです。そのやうな礼儀に馴れないものだから、私は一寸とまどひしてしまひました。<sup>19)</sup>

堀口の残した文章などには日本におけるコクトーの行動や会話の記録といった性質のものが多いのに対して、林の文はむしろ彼に接した際の自らの気持ちを書き綴つたものという印象が強い。しかし上の引用のような「挨拶」をされれば、林でなくとも、困惑と興奮との入り混じつたその時の感情を書き記さずにはいられなくなるに違いない。

この夜、こうして詩人を見送つた林はその二日後にあたる5月20日、日本ペン倶楽部の歓迎会の席で再びコクトーと席を並べることになった。その夜の林は歌舞伎見物の時とは違つてかなり積極的にコクトーとも言葉を交わしたようである。

会場では、飾りつけの黒い小石を手に取り、何の実だらうと云つて、私の手に半分わけてくれたのを私も間違へて木の実とおもひ噛んだりしました。

コクトオの仏蘭西語にまけないで、隣席の私も日本語でおしゃべりしました。通訳してもらふめんだうさより、何か率直に弾けてゆくやうな愉しさでした。だけど、途中で何かはがゆくなると、堀口さんや、芹澤さん（註：芹澤光治良 1897 - 1993）、永戸さん（註：永戸政治・東京日々新聞学芸部副部長 1891 - 1956）に言葉をおたのみしてしまひます。日本の言葉も早く世界中通じるやうになればいいなど、そんな大きなことを考へたりしました。20)

飾りつけ用の黒い小石についての他に、この席でどのような会話が交わされたのかは残念ながら記されてはいないが、上の文章からは林とコクトーとの間の、初対面の時とは比較にならないほどに打ち解けた雰囲気を感じ取ることができるだろう。また、後にコクトーが彼女の横顔をデッサンして「フミコ・ハヤシへ 1931年のパリ、東京の思い出に」という言葉を添えて贈っていることから考えると、彼らの間では1931年から32年にかけての林のパリ滞在についてや、映画「詩人の血」を見て感心したことなどがおそらく話題となったのであろう。

なお、コクトーの肖像画に対して、林の側からは手鏡と京都の首人形とが贈られているが、滞京中のコクトーは手遊びでデッサンを描く際に男女二体の首人形の柄の端の部分に気に入って、ペン代わりに使っていたともいう。21)

ところで、林の残した文章はコクトーとの会見の記録というよりは、詩人に会った際の彼女自身の感懐を綴ったものであるという印象が強い、と先に書いた。つまりコクトーが林に対して何を話したのかということではなく、コクトーと会って彼女はどう思ったのかということが林の文章の主題となっているのである。そのことから判断すれば、林にとってのコクトーとは文学上の研究や興味の対象というよりは、彼女自身に刺激を与えてくれる、いわば触媒のような存在であったと考えることもできるだろう。

もちろん、研究者や批評家ではなく小説家であった林にとっては、そうしたコクトーからの刺激の受け方はまったく自然なものである。パリでコクトーの映画を見た夜も、林は日記に「一寸おそろしい映画だ、あんなのを見るといい小説が書きたくなる」と綴っていたが、刺激的な作品に触れて創作意欲を掻き立てられる林の姿はむしろ作家としては当然のものと言えるだろう。

「コクトオに会ふ」と題された林の随筆も、こんな一節によって締めくくられている。

かうして机の前にあることさへもばかばかしいと考へる折がある。コクトオの初印象を風葬が似合ふと不吉な失礼なことを云つたけれども、本当は、気持ちの中に、世界をまはりそんなふうにもよいかたと云つた気持ちが多分にあるせみからかもしれない。22)

コクトーとの会見の印象記を自分自身の漂泊への思いによってまとめるあたりはいかにも林らしいが、実際に彼女がこの年の9月、新聞社主催の「流行作家国立公園早廻り競争」に参加し、さらに翌月には中国へと旅出つことになったのは、あるいは「触媒」たるコクトーの「八十日間世界一周旅行」に刺激されてのことであったのかもしれない。

われはかの良き<sup>よ</sup>仏蘭<sup>フランス</sup>西語<sup>ご</sup>を愛す。

なめらかなる波をはらみて

飛沫<sup>しぶき</sup>ゆく情熱を、真実を

(柳澤健「言葉」より) 23)

詩人であり外交官でもあった柳澤健(1889 - 1953)は、朝日新聞の社員時代に遊学したパリでの生活が忘れられず、帰国後、文官試験を受け直して外務省に入ったほどのフランス最上層であった。新聞社員として、また外交官として滞在したパリで柳澤は、文学、絵画、音楽、演劇等、様々な活動が展開される多くの場所へと足を運びながら自身の芸術観を確かなものにしていく。彼の芸術観について海野弘は「芸術とは一つのものであり、音楽や絵画や文学は互いにまったく無縁なのではなく、ひびきあっている」<sup>24)</sup>と説明しているが、つまり柳澤は、あらゆる芸術は独立して存在するのではなく、それぞれが分野を越えて影響を与え合いながら豊かな果実を生み出していくのだ、と考えていたということであろう。

柳澤が滞在した1920年代のパリは、街全体が爆発的な芸術の開花に彩られた「狂乱の時代」とでもいうべき時期にあった。そしてコクトーは、ちょうどそんな時期に文学の最前線へと踊り出て、活発な創作活動を繰り広げていくのである。1917年にディアギレフ率いるロシア・バレエ団が上演した「パラード」はコクトーの台本、ピカソの衣裳・舞台装置、エリック・サティの音楽、レオニード・マシンの振付からなる前衛バレエであったが、観客の理解を超えたその内容によってこの公演は一大「スキャンダル」を巻き起こすこととなった。それまではブルジョアのサロンに出入りする若手詩人の一人に過ぎなかったコクトーはこのスキャンダルによって逆に、時代の先端に位置する芸術家として認知されることになるのだが、1920年に初めてパリに入った柳澤は実はこの「パラード」の再演に立ち合っているのである。

初演では多様な芸術に慣れ親しんでいるはずのパリの人々をも憤慨させることになった「パラード」も、再演の際にはかなりの好評をもって受け入れられたらしいが、数少ない日本人の観覧者として、柳澤はどう理解すれば良いのかという戸惑いを交えながらもその詳細な観劇の記録を残している。

この『芸当(註:パラードのこと)』は、自分が巴里に於て見たもののうち最も『変わったもの』であった。音楽も振付も背景も衣裳も一切何もかもふくめてこの『変わったもの』という数字に要約できる気までした。<sup>25)</sup>

柳澤はこの書き出しの後、奇抜な音楽や筋立て、滑稽な振付、そして何よりもバレエの常識を超えた踊り子達の衣裳について詳しく描写していくのだが、古典から前衛まで、あらゆる領域の芸術を吸収しようと努めていた彼にとってもこの舞台は忘れることのできない強烈な印象を残すものとなったようである。芸術はそれぞれが単独で成立するのではなく、様々な創作活動がおたがいに影響を与え合いながら発展していくのだと考える柳澤にとっては、文学と美術と音楽と舞踏とが一体となったこのロシア・バレエの舞台は、彼の芸術観を鮮烈な形で裏付けてくれる作品だったのである。

柳澤は1927（昭和2）年にパリ大使館での仕事を終えると、次の赴任地であるストックホルムを経て、日本へと帰国する。そして「パレード」の観劇から十六年の後、昭和11年に彼はその作者であったコクトーを日本で迎えることになるのである。東京に到着したコクトーとともに明治神宮を訪れた柳澤は、その後、外務省の主催する歓迎会へとこの詩人を招待しているが、芸術にどっぷりと浸りきっていたパリでの日々を象徴するかのような、あの「パレード」の作り手・コクトーと対面したときの柳澤の心情はどのようなものであったろうか。かつて驚嘆とともに目撃したロシア・バレエの舞台についておそらく柳澤は熱心にコクトーと語り合ったのだろうが、歌舞伎観劇を直後に控えた忙しい日程のためか、この招宴についてコクトーは旅行記の中には何の記述も残してはいない。

柳澤の方にもこのコクトーとの対面について公に表した文章はないようだが、柳澤自身はこの後も何冊かの著作を残してはいるものの、詩人としても芸術批評家としてもそれほど広く知られることのないまま、彼はその生涯を終えることとなった。それは、様々な芸術が一体となりながら生成を繰り返していたパリと、それぞれの領域の内にもって芸術家が創作を続けることの多かった日本との文化状況の違いのせいだったのかもしれないし、外交官の仕事が柳澤から執筆の時間と機会とを次第に奪っていったためなのかもしれない。

### 碧眼の人形

生れ故郷を後に見て  
黄金色<sup>きんいろ</sup>の帆の船に乗り  
はるばる遠い海の旅。

漸くここに来て見れば  
畳の床に紙の窓  
みんな見馴れぬものばかり。

夜ともなれば人形は  
淋しい部屋にひとりぼち

故郷くにを思うて涙ぐむ。26)

これは柳澤が「碧い眼をした人形」を題材として書いた童謡であるが、こよなく愛したヨーロッパを離れて日本へと戻った自分の心境を、あるいは彼が、舶来の人形に託して歌った一篇と考えることもできるのではないだろうか。

## 2 コクトーと日本文学

前の章では、来日に先立つ時期に精力的にコクトーを紹介していた文学者として堀口大學、佐藤朔、そして堀辰雄の名を挙げたが、この三人の中で唯一コクトー本人と会うことのなかったのは堀辰雄であった。この章ではその堀辰雄とコクトーとの関わりや、コクトーにとっての日本文学という問題について考察することにしたい。

堀辰雄（1904 - 1953）がコクトーの作品に初めて出会ったのは大正の末頃、堀口大學がコクトー詩の日本で最初の翻訳を発表しはじめたのとほぼ同じ時期であった。大正15年4月に発行された雑誌「驢馬」の創刊号には堀による二篇のコクトー訳詩が掲載されているから、彼は堀口と並ぶ日本で最も早いコクトーの紹介者であったとすることができるだろう。

以降、堀は入手できるかぎりのコクトーの著作をフランスから取り寄せては気に入った箇所を翻訳し、いくつもの雑誌に発表していくことになる。昭和4年に行なわれた「文士アンケート」の中で「好きな花・土地・人」を問われた堀は、「どの花も人間よりましであるが、みんな莫迦だ。そこへ行くと人間は苦痛を持つてゐるので僕には興味がある。僕の好きなものはもつとも苦しんでゐる人間中の人間だ。ジャン・コクトオの如きものだ」27)と答えているくらいだから、この時期の堀のコクトーへの傾倒ぶりは推して知るべしである。

このアンケートと同じ昭和4年に堀は、それまでに発表した翻訳にいくつかの新訳を加えて『コクトオ抄』と題する一冊の本を上梓した。それは「小説やエッセーの抄訳があって、コクトー像の輪郭をおよそ知るには便利な本」28)と佐藤朔が書いているとおり、主として詩作品が中心であった堀口の翻訳よりもさらに広範なコクトーの文学世界を日本の読者に提示するものであった。

もちろんコクトーに対する堀のこうした熱中は、翻訳の仕事だけではなく、彼自身の創作の面にも様々な影響の跡を残すものとなっていく。

花よ小鳥らよ  
私の骨の森のなかで  
仲良く暮らすがいい 29)

例えば、堀がこんなふうに訳したコクトー詩の一節は、そのまま堀自身の次のような詩篇のモチーフとして生かされていくのである。

僕の骨にとまつてゐる  
小鳥よ 肺結核よ  
おまへが嘴で突つくから  
僕の痰には血がまじる

おまへが羽ばたくと  
僕は咳をする

おまへを眠らせるために  
僕は吸入器をかけよう 30)

こうした詩行の上だけではなく、初期の堀の小説の中にもまたコクトーの影響の跡を読み取ることはそれほど困難ではない。例えば『不器用な天使』と題する小品は、堀自身もその執筆の経緯について「『不器用な天使』は 1928 年の夏に書いた。コクトオやラジィゲの小説をはじめ知った頃で、自分も何か新しい型の小説を試みたいと大いに意気込んだが、いざ構想しだしてみると、私の力が未熟だつたせゐか、十分に小説的な展開が出来ず、ただその主人公の苦しげな生のあへぎだけの感ぜられるやうなものになつてしまつた」31)と書いているとおり、そのタイトルからしてあまりにコクトー的な一篇であった。この短篇の下敷きとなっているのは、堀自身が「現代の若い作家の書いた小説の中では(中略)ずば抜けてゐる」32)と評したコクトーの中篇小説『グラン・テカール(大股開き)』であり、登場人物の構成から細部の表現に至るまで、両者を比較して読むときに発見できる共通点は少なくはない。

文学上の形成期にこうして大きな影響を受けたコクトーがやがて日本にやって来るのは昭和 11 年、堀にとっては『コクトオ抄』の発表から七年の後のことであつた。ではその時の堀は、熱中とともに読み耽つたフランス詩人の来日に対してどのような態度を見せたのであろうか。友人であつた作家の丸岡明は当時の堀について興味深い証言を残している。

コクトオの東京滞在中のある夜、堀辰雄とその頃の出雲橋際の“はせ川”へいつた。ちようど林房雄も来合せていて、コクトオを訪ねていつたらいいじやあないかと、堀辰雄をからかつた。堀辰雄はひと言少年らしい高い声で、  
「うるさい」と怒鳴つた。33)

では、なぜ堀はあれだけ傾倒したコクトーが東京まで来ているにもかかわらず、会いには行かなかったのでしょうか。

その一つの理由としては、この時期の堀とコクトー文学との距離が以前ほどには近いものでなくなっていたことが挙げられるだろう。『コクトオ抄』の出版（昭和4年）以降、このフランス詩人に関する堀の文章は次第に減りはじめるが、おそらくそれは、分散していたそれまでの翻訳を一冊の本にまとめ終えたことにより、コクトー紹介の仕事にも区切りがついたという気持ちがあったためでもあるのだろう。しかしそれ以上に考慮しなければならないのは、最初の小説作品集『不器用な天使』（昭和5年）を出した頃から、文学に対する堀自身の嗜好が徐々に変化を見せはじめていた点である。堀辰雄は最晩年に至るまで外国文学からの摂取をやめようとしなかった貪欲な小説家であったが、彼の興味の対象は初期のコクトーやラディゲから、プルースト、さらには Rilke や モーリアックへと、それぞれの時期に応じて変遷を続けたのである。もちろんこれらの文学者から堀の内部へと流れ込んだものは時代とともに彼自身の文学世界を広げ、また深めていくことになるのだが、ちょうどコクトーが来日した時期にそんな堀が熱中していたのは、コクトーではなく、Rilke や モーリアックなのであった。

来日したコクトーを堀が訪ねず、また「会いに行け」と言われてむしろ腹を立てたもう一つの理由は、彼が堀口大學に対する羨望や、自分自身に対する苛立ちを抱いていたのではないかと、いう点にある。かつて堀がコクトーに傾倒していたことは彼の周囲の人間なら誰もが知る事実であった。また堀自身が、日本におけるコクトー文学の重要な紹介者の一人であることを自負していたとすれば、たとえこの時期にはその作品から離れていたとしても、来日に際してコクトー本人と話をしてみたいと思わないはずはなかったであろう。

しかも堀と並ぶコクトーの紹介者と考えられていたもう一方の堀口大學はといえば、コクトーとともに各地を訪問する様子を連日のように新聞によって報じられているのである。当時の堀の心中については想像することしかできないが、林房雄に「うるさい」と怒鳴った時の彼の内では、おそらくコクトーと身近に接している堀口に対するある種の羨望や嫉妬、さらにはそんなコクトーに会いに行く決心をつけられないでいる自分自身に対する苛立ちなどが混ざり合っていたのではないだろうか。

何度も書いたとおり、この時期の堀とコクトーの文学との間には幾らかの距離があった。しかしただ作品から遠ざかっているというだけでは、たとえ「会ってみる」とからかわれたとしても腹を立てるほどのことはなかったに違いない。文学上の距離だけではなく、やはり自らの裡に嫉妬や苛立ちといった人間的な感情を抱え込んでいたからこそ、堀は憤激して「少年らしい」声を上げたのではないだろうか。

結局、堀はその後、コクトーと会う機会を持たないままに彼の離日を迎えることになった。この時期の、あるいはこれ以降の堀自身の文学について考えるなら、たとえこの時、

彼がコクトーに会っていたとしても堀の作品そのものにはそれほど大きな変化が現われることはなかったかもしれない。しかしまた、もし堀とコクトーとの対面が実現し、堀によるコクトーとの対話の記録やコクトー論が残されていたらと考えると、彼らの会見がないままに終わったのはやはり残念としか言いようがない。

コクトーによって大きな影響を与えられた日本の文学者としては、この堀辰雄の他にももちろん多くの名前を挙げるができる。例えば、戦後におけるコクトー紹介の代表者の一人には澁澤龍彦（1928 - 1987）があったが、コクトーの来日時に彼はまだ八歳、後に澁澤が「コクトーを読み、その軽業師ふうの危険な生き方に強く惹かれ」<sup>34</sup>ることになるのはそれから十年以上が経ってからのことであった。

同様にコクトーの作品だけではなく、彼の生き方そのものにも大きな影響を受けたと思われる文学者としては三島由紀夫（1925 - 1970）も忘れることができないだろう。活字によってだけではなくあらゆる媒体を通して自分自身を露出させていく三島の生き方はそのままコクトーと重なり合うものであるが、しかしいくら早熟な文学少年の三島であっても、学生時代の同人誌の中で初めてコクトーの名を挙げるのは詩人の来日から六年が経った昭和 17 年、三島が十七歳になってからのことであった。後に三島は昭和 35 年のパリで、岸恵子の出演する舞台を演出中のコクトーと対面し、「一種の感激を禁じえなかった。これが永年憧れてきたコクトーその人だと思うと、後光がさしているようにみえた、というのは大袈裟すぎるだろうか」<sup>35</sup>と書き記すことになるのだが、この三島や澁澤ら、戦後の文学者とコクトーとの関係についてはまた稿を改めて論ずることとしたい。

ここまでは、来日したコクトーと実際に接した文学者達や、コクトーに大きな影響を受けながらも結局、会うことのなかった堀辰雄らについて検討してきたが、この章の最後では日本文学の側から見たコクトーではなく、コクトーの側から見た日本文学についても触れておくこととしたい。

現在ほど多くの日本文学作品が翻訳されてはいなかった当時であって、日本語のできなかったコクトーがそれほど熱心な日本文学の読者であったと言うことはもちろんできない。しかしこのフランス詩人が日本の文学に触れた経験がまったくなかったわけではないことは、評論家・小松清（1900-1962）に答えた当時の新聞インタビューによっても明らかである。

現代の日本文学に就いては僕は無知だ。それを知る機会が仏蘭西で与へられてないからだ。現代物の翻訳はごく少しいし信頼できるものは尚さら少い。古典では英訳で「源氏物語」を読んだ。これは立派な世界文学史上の名作だと思ふ。もつと近代のものでは佐藤謙の仏訳した西鶴の作を愛読してゐる。西鶴のものはもつと広くよんでみたい。<sup>36</sup>

コクトーが『源氏物語』全巻の英訳を読みとおせるだけの英語力と時間の余裕とを持っていたとは考えにくく、おそらく彼が目を通した『源氏』とは全体の筋を要約したものか、あるいは抄訳本に近い形のものであったのだろう。しかしもう一つの愛読書として挙げた西鶴については、それが意外なものであるだけに、コクトーが実際にその翻訳を読んでいた可能性は高い。コクトーの持っていた仏訳が西鶴のどの作品のものなのかは明らかではないし、「愛読してある」という言葉にはたしかに訪問先でのリップサービスの要素が多分に含まれていたのかもしれない。しかし生涯を通じて絶えず新鮮な芸術上の刺激を求め続けたコクトーであってみれば「西鶴のものはもつと広くよんでみたい」と語る彼の言葉にはそれほど誇張を感じ取る必要はないであろう。

そしてコクトーは、これらの作品から得た知識に基づきながら、日本文学の現在についてもこんなふうに語っている。

現代の作品については今云つたやうに無知に近いが、僕の狭い見聞の範囲から僕だけの考へをのべると、過去何世期かの間うけ継がれてきた<sup>デコラティブ</sup>装飾的スタイルの伝統が、今日西欧文学の影響下でどう整理されて行くか、それが問題だ。その為にはおそらくイメージ的修辞の過剰を一掃することが必要なのではなからうか。文学上の当面の問題として、革命の文学以上に文学の革命が要求されるのではなからうか。37)

この文章からは、コクトーの日本文学に対する見解の一端をうかがい知ることができるだろう。つまりコクトーの目には、日本文学とは「装飾的スタイル」(style = 文体・用語法)を伝統として受け継ぐものであり、過剰な「イメージ的修辞」(image = 比喩、象徴)によって飾られたものと映ったのである。彼自身が語っているとおり、こうしたコクトーの見方はごく限られた翻訳作品から導き出されたものに過ぎないが、物語の展開やテーマの面からではなく、伝統的な修辞や過剰な比喩といった言葉や表現の面から日本文学を捉えようとするその姿勢はいかにも詩人らしいものと言えるだろう。

そして最後にコクトーは、現代の日本文学が西欧文学の影響下で新たな地平を切り開いていくためには「革命の文学以上に文学の革命」が必要だと述べている。この場合の「革命の文学」とは、おそらく、既成の権威や価値を激しく否定したダダやシュルレアリスムなどの文学を指すものであり、また一方の「文学の革命」とは、それまでの伝統を変革して新しい文学を作り上げていこうとする芸術上の態度そのものを指していると考えてもよいであろう。つまりコクトーは、日本の文学が新たな領域へと踏み出していくためには、西欧から「革命の文学」をただ移入するのではなく、自分達の文学の伝統を見つめ直すことによって、それを乗り越えていくことこそが必要だと語っているのである。

コクトーが日本文学について論じた文章としては彼自身の著作も含めてここに紹介した記事だけしか見つかってはいないが、これらの言葉からは「日本文学について語れ」という困難な要請にも真摯に応えていく彼の姿勢ばかりではなく、わずかな材料や経験からだ

けでも物事の本質を直観的に捉えようとする詩人・コクトーの在り方をも見て取ることができるのではないだろうか。

### 3 コクトーと日本の画家達

デッサンの腕を友人のピカソにも認められるほどであったコクトーは、日本に滞在する間もわずかな時間を見つけてはペンと紙とを取り上げて、飽きることもなく様々なものを描き続けた。

東京に滞在した五日の間に、ジャン・コクトーは百人にも余る初見の人たちに会い、いちいち愛想のよい挨拶を交わし、微笑を贈っていたが、この応対に疲れると、出来るだけホテルの部屋にこもり、夜となく、昼となく、画用紙をひろげ、デッサンをして楽しんだ。何よりこれが疲れを休め、心身両方のリクリエーションになるらしかった。(38)

これは堀口大學が書きとめた、ホテルの部屋でくつろぐ詩人の姿であるが、実際にコクトーはデッサンを描いている時が何より楽しかったらしく、一旦、画帳を取り上げると堀口が止めようとしても止まらなくなるほどに熱中してペンを走らせ続けたという。

構図など全く念頭に置かず、ただ無心に手先を素早く動かしているとしか見えない作業から、機械の、とも言いたいほどの正確無比なイメージが、輪転機のスピードで、つぎつぎに紙の上に生まれて来るのを、そばで見ている、驚いたり、あきれたり、どうしてそんな神わざのような、手品のようなことが出来るのかと尋ねる僕に、

手が勝手に描いているんだよ、堀口君、僕自身も知らないんだよ！」と、コクトーは答えたが、これは虚飾の答えでは決してなかった。(39)

堀口に贈られた見事な肖像画もそうして生み出された作品の一つであるが、晩年近くなってから油絵などの彩色画も試みてはいるものの、この時期のコクトーはインクの単純な線のみによって構成されたデッサン（線画）を専門としていた。それらのデッサンにはしばしば詩の言葉が添えられ、全体として一つの総合芸術作品とでも呼ぶべきものとなっていたが、コクトー自身はデッサンを中心とした彼の絵画作品を「POESIE GRAPHIQUE（絵画の詩）」と呼んで、詩の表現形態の一つと考えていたのだった。「彼は、『僕はデッサンを書くので描くのではない。』と言つてみた。デッサンは僕の心臓の言葉だとも言つてみた」(40)という堀口の証言も、「デッサン＝詩の一形態」というコクトーの考えを裏付けるものと言つてよいだろう。

そして、そんなコクトーが日本の土産品として選んだのは、やはり絵画に関わりのあるものであった。

慣れるまでは、なかなか使ひこなせない毛筆も最初から何の躊躇もなく自由自在に使ひこなした。大そう気に入って毛筆をどつさり仕入れてかへつた。唐紙の大色紙も好きになつて三百枚近く持つてかへつた。41)

これらの毛筆によって書かれたコクトーの作品がどのようなものであったのかは明らかではないが、日本の土産として選んだのが筆や色紙だったというのは、いかにもデッサン好きだったコクトーらしいエピソードである。

それでは、これほどまでにデッサンを愛好し、フランス本国では作家達よりもむしろ画家や音楽家達と交流することの方が多かったコクトーは、来日の際に日本の画家達とはどのような関わりを持つことになったのであろうか。

来日中のコクトーと最も親しく接した画家は言うまでもなく、パリ時代からの旧知の仲であった藤田嗣治(1886-1968)である。藤田とコクトーとの関係については先に発表した論文「コクトーと藤田嗣治」の中で触れたのでここではあまり繰り返さないが、国技館で相撲を見物したり、絵画展を見に出かけたりと、彼らは東京での多くの時間をともに過ごしている。

ではコクトーは、この藤田をのぞいては日本の画家達とはどのような交わりを持ったのであろうか。本稿の冒頭に引用した旅行記の中では、コクトーは「(...)若い画家達や、官展派の画家達の代表について、私はここでは書かない」2)と記していたが、実は彼はこの一節の少し後に次のような文章を続けているのである。

私は伝統的なカケモノ(掛物)の展覧会と、若い画家達の展覧会の特別招待日へと出かける。

掛物の画家達は先祖伝来の衣裳を着けている。若い画家達はモンパルナス風の鳥打帽にツイードである。たくさんの器用さ、力、優美さ、機敏さが双方(の展覧会)ともに費やされている。一方はこの帝国の基盤であり、もう一方は先端である。42)

2)の引用中の「若い画家達や、官展派の画家達の代表について」とは、「若い画家達の展覧会」と「伝統的な掛物の展覧会」から代表者がそれぞれコクトーのホテルを訪ね、自分達の絵画展を見に来てくれるように頼んだことを指している。

それらのうち、コクトーが「官展派」と呼んだ「伝統的な掛物の展覧会」とは、ちょうど上野の美術館で開幕を迎えた「日本南画院展」のことであったが、この展覧会にはコクトーと秘書のキル、そして堀口の他には佐藤朔と藤田嗣治が同行していた。第一章で触れた、佐藤の論文をめぐるコクトーとの会話は、この南画院展へと向かう車中で行なわれた

ものであった。

ところで一行の案内役であった堀口は、この訪問について「南画院から、今日は招待日だから見に来てくれと言ってきた」43)と書いている。当時の資料を見ると南画院展の特別招待日は5月21日となっているから、一行がこの絵画展を訪れたのはコクトーが日本を離れる前日にあたる木曜であったことになる。

南画院展訪問の詳細についてコクトー自身は旅行記の中には綴っていないが、会場を訪れた際の詩人の感想は堀口大學が代わって書き残してくれている。

僕（註：コクトー）等の国の画家は、自然を描く場合にも絶えず自己を主張しつづけるので、その気持が画面にまで現はれて、どんな風景の中にも、画家の『おれが！』『おれが！』と叫ぶ声が残つてゐて五月蠅くつてしかたがない。これ等の日本画を見ると、画家は全然自然の中に没入してゐて、画面には自然そのものだけが現はれてゐるので気持がよい。44)

このコクトーの評言は、そのまま西洋と東洋との自然観、芸術観の違いにつながるものと言ってもよいだろう。自然との対峙の中で、個我を主張することによって何世紀もの歴史を築いてきた西欧と、自然の中に溶け込み、己を消し去ることによって芸術の伝統を重ねてきた日本。ただし、もちろんこれは東西の絵画を比較した場合のことであって、日本画にも描き手の個性がはっきりと現われているものは多いのだが、それでも、ほとんど初めて目にしたに等しい南画の感想としてはコクトーの言葉は当を得たものと言えるだろう。

なお、この展覧会でコクトーの興味を最も惹いたのは水越松南の「虎児」の画、ことに仔虎達が戯れている部分であったと堀口は報告している。資料によれば、松南は明治21（1888）年に神戸で生まれ（昭和60/1985年没）伝統的な水墨画の技法を学んだ後、その写実表現に飽き足らずにフランス後期印象派の影響をも受けながら独自の画風の確立を目指した、とある。松南の絵が伝統的な南画ではなくフランス印象派の色彩をも宿したものであったことが、あるいはかえってコクトーの関心を惹くことになったのであろうか。

日本絵画の伝統の「基盤」をなすもの、とコクトーが呼んだこの南画院展に続いて、一行は絵画の歴史の「先端」に当たる「表現展」を訪れている。この訪問についてもコクトーは旅行記の中で詳しくは触れていないので、ここでも堀口の文章を引用することにしよう。

南画院から帰途、銀座の紀伊国屋画廊で、「表現展」を見た。その朝、六人の若い同人がホテルへ訪ねて来て、暇があつたら、自分達の展覧会を見て批評してくれと申し入れたのであつた。

会場へ入ると、彼はまづ、

僕は専門の批評家でないから、見てすぐいきなり批評はできない。まづ一とほり拝見ませう。」と言ひながら、藤田画伯の説明で見て廻つた。45)

この文章からは、若手画家達の開いた「表現展」をコクトーが訪れるに至った経緯を知ることができる。コクトーの東京での行動は連日のように新聞で報道されていたから、彼に興味を持った多くの人間が滞在先の帝国ホテルへと押しかけていたのだろう。ラディゲやジャン・マレー、ジャン・ジュネなど多くの才能ある若者を世に送り出したコクトーであってみれば、彼を慕ってやって来る若い芸術家達の訪問は嬉しいものではあっても、決して疎ましいものではなかったに違いない。本稿の第一章において「来日中のコクトーを最も喜ばせたのは若い詩人達や熱心な愛読者との会見であった」と書いたが、表現展の若い画家達の誘いもやはりコクトーにとっては喜ばしいものであったのか、連日の疲れにもかかわらず彼は銀座へと向かうことになったのである。

なお「表現展」とは、コクトー訪問の前年にあたる昭和10年に帝国美術学校（現武蔵野美術大学）の学生達が結成した絵画グループ「表現」（おそらくドイツ表現主義の影響による命名であろう）の展覧会であり、そこに絵を出品していたのはまだ駆け出しの画学生達であった。

しかしたとえ無名の青年達の展覧会であっても、この会場を訪れたコクトーがどれだけ丁寧に彼らの作品に接したのかは、堀口の書き残した次の一節からも感じ取ることができる。

コクトーは各画家にどれが一番の近作かと訊ねて、その一点に注意力を集中して難解なこれら表現派の作品の中に秘められた各画家の意図を探らうとつとめらしかつた。やがて一巡し終ると、今度はもう一度、各々の絵の前に立つて、実に丁寧に批評を初めた。藤田画伯はじめ一同コクトーの親切な努力には舌を巻いて驚いた。大塚耕二君の作品に一番感心してゐたが、その他の人の作品に対しても一々適切な批判を加へた。彼の言葉をきいて、初めて僕なんかには画家の意図の在り所の知られる作品も一つや二つではなかつた。46)

表現展に参加していた画家達の中でコクトーに特に気に入られたという大塚耕二（1914-1945）は、この時は美大在学中の二十二歳、まだ全く無名に近い存在であった。大塚は卒業後、次第に頭角を現わし、後に瀧口修造をして「造形詩人」と言わしめるに至るのだが、第二次大戦で出征した昭和20年、その才能を開花しきることなく三十一歳の若さで戦死することになる。

もちろんこの時の大塚はその後に待ちうける自身の運命など知る由もなかつたが、少なくとも、眩いほどの名声に彩られたフランスの詩人に信じられないくらいの懇切さをもって、出品作「丘」を評されたその瞬間の大塚の昂揚だけは確かなものであったに違いない。

来日中のコクトーはこの他にも多くの有名無名の芸術家に接した可能性があるが、そうした出会いについては残念ながらコクトーの側にも日本の側にも記録は残っていない。この章ではこれまで、東京でのコクトーと日本の画家達との交わりについて考えてきたが、最後に、実際の接触こそなかったものの、日本におけるコクトーを考える上で重要な意味を持つ画家・東郷青児（1897-1978）についても触れておきたい。

東郷は第一章で紹介した柳澤健らともパリ留学中に親交を結び、様々な都会の遊びも経験したらしいが、そんな東郷とコクトーとの関わりが生まれるのはむしろ彼が日本に帰国してからのことであった。昭和3年に帰国した後の東郷はその絵画作品よりも、結婚直後に起こした別の女性との心中未遂事件や、作家・宇野千代との同棲など、派手な私生活によって世間の耳目を集めることになった。その東郷は宇野と暮らし始めた昭和5年の9月に二冊の本を出版しているが、そのうちの一冊は油絵の技法書『洋画の鑑賞』であり、もう一冊がコクトーの小説『怖るべき子供たち』の翻訳（白水社版）だったのである。

醜聞に彩られた洋行帰りの画家が発表したこのコクトーの翻訳は、主人公の姉弟の築き上げる純粹で無垢な無秩序の世界への驚きもあって、大きな話題を集めることとなった。ただし東郷の評伝作家・田中穰は、この翻訳はゴーストライターの仕事であった可能性が高いとしている<sup>47)</sup>が、その一方で、この時期に東郷と暮らしていた宇野千代はこんなふうにも書いている。

その頃のことであったが、東郷は私の仕事である、ものを書くと言ふことを真似たりした。（中略）東郷は書くことも上手であったが、フランスの小説を日本語に直す所謂、翻訳の仕事もした。「恐るべき子供たち」「ドルジェル伯の舞踏会」などの東郷の名訳は、いまでも、私の本棚に残ってゐる。<sup>48)</sup>

ともに暮らした東郷の仕事を引き立てようとして宇野がこのように書いた可能性はあるだろうが、実際に彼が翻訳したにせよ、あるいはゴーストライターの持ってきた下訳に目を通した程度であったにせよ、少なくとも東郷自身がこの小説に十葉あまりの挿絵を添え、その後のいくつかの版のために以下のような「あとがき」を寄せたことだけは確かである。

この本を読みながらコクトーに油絵を描かせたらずいぶん奇妙なものを書くだろうと思った。画家の私から見ると、この詩小説はほとんど色彩を感じない。「怖るべき子供たち」はコクトーの詩小説の中でも、特に神経の鋭いものだと思うが、彼のパレットには灰色か白か、さもなければ燻銀のような黒しか並べていないようである。たまたま消防ポンプのあの毒々しい赤を閃光のように投げかけたりするが、瞬間的な効果であって、基調色とはならない。阿片を吸って、茫漠とさまよう空間には不思議と色を感じないそ

うだが、コクトーの感覚はその類であるのかもわからない。(後略) 49)

コクトーの小説を色彩の感覚によって語っているのはいかにも画家らしい視点である。コクトー自身もこの作品のために描いた六十枚ほどの挿絵を一冊の本にまとめて出版しているが、「この詩小説はほとんど色彩を感じない」という東郷の言葉どおり、それらの絵の大部分はコクトー得意の単彩のデッサンであった。またコクトーが脚色したモノクロ映画「恐るべき子供たち」(1949年、ジャン＝ピエール・メルヴィル監督)の影響もあって、たしかにこの作品は派手な色彩を想起させるものというよりは、白と黒との世界に展開される物語といった印象が強い。もちろん印刷技術の発達した今日ならコクトーはフルカラーの挿絵を描いたかもしれないし、極彩色の画面が連続する映画を撮ったかもしれないが、少なくとも有名な雪合戦の場面や、姉弟が閉じこもって暮らす広間の装飾、命を奪う「毒の玉」などはやはり白と黒とに彩られたものであったに違いない。

ところで、後に日本の洋画壇を牛耳るほどの実力者となる東郷は、宇野の言葉どおり文章を書くことも好きであったらしく、何冊もの著作を残している。しかし、上に引用した「あとがき」をのぞいては、それらの中にこの小説やその作者であるコクトーに関する記述を見つけることはほとんどできない。そうした点から考えると、やはり『怖るべき子供たち』の翻訳はゴーストライターの手によるものであったとする方が自然なのかもしれないが、たとえ実際の訳者が別の人間であったとしても、東郷の名義で発表されたこの小説の翻訳は、前述したとおり大きな反響を呼び、若者の間で「怖るべき」という言葉が流行したほどでもあったという。

それまで日本で紹介されていたコクトーの作品は堀口らによる詩の翻訳が中心であり、小説に関しては堀辰雄の部分訳が発表されていた程度であったから、東郷訳『怖るべき子供たち』の出版は、日本の読者に対してコクトー文学の新たな一面を示したという点で大きな意味を持つものであった。もちろん「詩」という文学形式に比べて「小説」は遥かに多くの読者を持ち得るものであることを考えれば、この翻訳の発表によってコクトーの名が日本の人々の間にさらに広く浸透することになったであろうことも指摘しておかなければならない。コクトーが日本にやって来たのはこの翻訳の出版から六年後のことであったが、フランスの詩人が行く先々で「王様のやうな歓迎」(50)を受けることになった背景には、東郷訳『怖るべき子供たち』の成功があったことも忘れてはならないだろう。

おそらくコクトー自身は東郷の名前も知らないままに日本を離れることになったのであろうし、東郷の側にもコクトーの来日について大きな関心を持っていたという記録は残ってはいない。しかしお互いについての認識や、実際の対面の有無には関わりなく、東郷青児訳の『怖るべき子供たち』は、日本におけるコクトー受容の歴史を考える上では決して欠くことのできない一冊となっているのである。

## 4 おわりに

本稿では、来日したコクトーと日本の芸術家達がどのような関わりを持ったのか、また彼らにとってコクトーとはどのような意味を持つ存在であったのか、という問題について考えてきた。ここで取り上げた芸術家達がコクトーに接した形は様々であったが、彼らがたどるその後の道のりもまたそれぞれに異なるものとなっていく。

「詩の友」と信ずるコクトーについて一生の間、書き続けた堀口大學や、コクトー研究の草分けとなった佐藤朔。コクトーの世界一周に刺激されたかのように各地を巡る旅へと出発することになった林芙美子や、コクトーをはじめとするパリの芸術をその身に体験しながらもやがて時代状況の中に埋もれていった柳澤健。堀辰雄は最後までコクトーに会うことはなかったが、堀文学の出発点におけるコクトーの意味はそれによって薄れることはないであろう。

詩人を案内した画家・藤田嗣治は戦争に翻弄され、後に日本を去ることになる一方で、コクトーに会わなかった東郷青児は戦後の画壇で絶大な力をふるう地位へと昇りつめていく。また、有名無名の詩人や画家達にかけられたコクトーの誠意ある言葉は、彼らを勇気づけ、新たな創作への刺激を与えるものとなったに違いない。

ジャン・コクトーという一人のフランス人を通して日本の芸術家達について考えてみる時、少なからぬ感慨を覚えずにはいられないのは、コクトーとの出会いという収束点で一度は交わった彼らの人生がその後、あまりにも多くの道へと分かれていくことになるからであろう。

それでは、もう一方のコクトーにとっては、日本で接した芸術家達はどのような存在であったのだろうか。彼の旅行記を読むかぎりでは、歌舞伎役者の菊五郎や芸者の喜春をのぞいては、コクトーの関心はそれほど多くの日本人の上には向けられていないようにも感じられる。

たしかに一人一人の日本人、各々の芸術家だけを取り上げて考えた場合には、彼らはコクトーにとっては世界一周の旅で出会った多くの人間のうちの何人かにすぎなかったのかもしれない。しかし堀口や藤田の導きによって訪ね歩いた日本への愛着や、実際に接した日本の芸術家達全体に向けられたコクトーの敬意は決して小さなものではなかったはずである。歌舞伎の公演がパリで行なわれれば彼は挨拶のために舞台に立ち、能の公演に際して文章を求められれば執筆の労を取り、審査委員長を務めた第七回のカンヌ映画祭では他の審査員達の反対を押し切って衣笠貞之介監督の「地獄門」(1953)にグランプリを与えているのである。

最後に引用するのは、そんなコクトーの日本への親愛の情が表れた一通の手紙である。それは訪日から二十年が経った1956年の4月、日本で映画を撮影中だったジャン・マレーに宛てられてのものであるが、日本人向けの「外交」文書ではなく、親密な友人に対して書

かれた私信であるだけに、そこに綴られている言葉はコクトーの真意を映したものと考えてもよいであろう。

私の愛しい天使へ

君達は、桃の花と屏風の下敷きになり、ついには龍の尾に絡めとられ、ひざまずいて口の中に海老の天ぷらを運んでくれる美しい貴婦人達の虜になったものと思っていました。日本には、素晴らしい魂の高貴さや、現代の世界が拒み、睡眠と混同してしまいそうになるあの夢の多くが、まだ残っているのです。(中略)

日本が、大きな扇子の一振りて君に新鮮な空気を送ってくれることを私は確信しています。日本の人達に、私がどれほど彼らを愛しているか、彼らの親切にどれほど私が感動しているのかを伝えてください。

一分ごとに君を思っています。くちづけとともに。

ジャン 51)

## 注

- 1) 「共愛学園前橋国際大学論集」、第2号、平成14年、参照。
- 2) Je passe la délégation des jeunes poètes, celle des jeunes peintres, celle des peintres officiels. La caisse de Passepartout est pleine de mes livres en langue nippone, de boîtes contenant des boîtes qui contiennent des boîtes, d'écritoires, de bâtons d'encre de Chine, de pinceaux et d'albums. (Cocteau, J., *Tour du monde en 80 jours (mon premier voyage)*, Gallimard, 1936, p.187.)
- 3) 『堀口大學全集』(小澤書店、昭和56~63年)、第6巻、464頁、「コクトオ口気」。なお本稿においては、原文で正字体が用いられている場合も、原則として新字体に改めて引用を行なうものとする。
- 4) 同、287頁、「コクトオの見た日本」。
- 5) 『月影の虹』所収(『堀口大學全集』、第1巻、387頁)。
- 6) 佐藤朔「ノーマンズランド」(「ユリイカ コクトー生誕百年特集号」、平成元年9月、70頁)。
- 7) 後者は前者論文を全面的に改稿して発表されたものであった。(「詩と詩論」、第2冊、昭和3年12月、1~31頁参照。なお「詩と詩論」は新散文詩、シュルレアリスム、フォルマリスム等の発表、批評の場として、昭和詩史の形成に欠くことのできない役割を果たした雑誌であった。)
- 8) 佐藤朔『モダニズム今昔』、小澤書店、昭和62年、269~270頁、「僕の手帖」。
- 9) 『堀口大學全集』、第6巻、289~290頁、「コクトオの見た日本」。

- 10)佐藤が長く中断していた詩作を再開したのは七十六歳になってからのことであった。  
(『モダニズム今昔』、「老境の処女詩集」参照)。
- 11)『堀口大學全集』、第7巻、481頁、「コクトオよ 女神とつれだって」。
- 近藤<sup>あずま</sup>東：1904 - 1988。雑誌「詩と詩論」等にも参加したモダニズム詩人。詩集に『抒情詩娘』(昭和7年)他。
- 長田<sup>おさだ</sup>恒雄：1902-1973。北園克衛、春山行夫らとともにモダニズム詩運動に参加した詩人、宗教評論家。
- 北園克衛：1902-1978。西脇順三郎、瀧口修造らとともにシュルレアリスム運動を展開し、雑誌「VOU」を創刊した。詩集に『白のアルバム』(昭和4年)他。
- 山本和夫：1907 - 。福井県出身の詩人、児童文学作家。詩集に『戦争』(昭和13年)、児童文学に『街をかついできた子』(昭和35年)らがある。
- 江間章子：1913 - 。「詩と詩論」等に参加したモダニズムの詩人。詩集に『春への招待』(昭和11年)他。
- 12) [...] une jeune poétesse m'offre un bouquet de fleurs de la part du président de la sociétés Gens de Lettres. ( Cocteau, op.cit., p.176. )
- 13)今川英子編『林芙美子 巴里の恋 / 巴里の小遣ひ帳 一九三二年の日記 夫への手紙』、中央公論社、平成13年、67頁。
- 14)同、67頁。
- 15)『林芙美子全集』、文泉堂出版、昭和52年、第10巻、211～212頁、「コクトオの映画」。
- 16)同、204頁、「コクトオ」。
- 17)同、207頁、「コクトオに会ふ」。
- 18)林は、堀口大學について「コクトオを『ジャン、ジャン』と呼んでいらつして如何にも愉しさうでした。自分の訳してゐる人に逢つた場合は、此親愛もヒレキ出来て、どんなにか愉しいのでせう」と書いている(同、204頁、「コクトオ」)。
- 19)同、205頁、「コクトオ」。
- 20)同、205頁。
- 21)『堀口大學全集』、第6巻、294頁、「コクトオの見た日本」参照。
- 22)『林芙美子全集』、第10巻、208頁、「コクトオに会ふ」。
- 23)柳澤健『現代詩人全集第12巻 柳澤健集』、新潮社、昭和5年、89頁。
- 24)海野弘『一九二〇年代の音楽』、音楽の友社、平成7年、68頁。
- 25)柳澤の原著『喚起と微笑の旅』は大正12年に中央美術社から出版されているが、今回は原本を入手できなかったため、海野弘の前掲書、61頁より引用した。
- 26)柳澤、前掲書、105頁。
- 27)『堀辰雄全集』、筑摩書房、昭和53年、第4巻、311頁。
- 28)佐藤朔『破壊と創造 - ジャン・コクトー芸術論』、昭和出版、昭和53年、161頁、「コクトーと私」。

- 29)堀辰雄、前掲書、362 頁。
- 30)同、325～326 頁。
- 31)同、257 頁。
- 32)同、618 頁。
- 33)「本の手帖 特集ジャン・コクトー追悼」、昭森社、昭和 38 年 11 月、46～47 頁、丸岡明「ジャン・コクトーと私」。
- 34)「別冊幻想文学 澁澤龍彦スペシャル」、幻想文学出版局、昭和 63 年 10 月、46 頁、澁澤龍彦「自筆年譜」。この年譜によれば澁澤がコクトーに熱中し始めたのは昭和 22 年ごろのことであったという。
- 35)三島由紀夫『芸術断想』、ちくま文庫、平成 7 年、293 頁、「稽古場のコクトー」。
- 36)「讀賣新聞」、昭和 11 年 5 月 27 日付夕刊、小松清「旅を賭けた詩人 訪日のコクトーと語る(3)」。
- 37)同上。
- 38)『堀口大學全集』、第 6 巻、569 頁、「思い出のコクトー」。
- 39)同、569 頁。
- 40)同、294 頁、「コクトーの見た日本」。
- 41)同、294 頁。
- 42) J'ouvre le vernissage d'une exposition de kakemonos traditionnels et une exposition de jeunes peintres.  
Les peintres de kakemonos portent le costume des ancêtres. Les jeunes peintres la casquette, les tweeds de Montparnasse. Beaucoup d'adresse, de force, de grâce, de vivacité, se dépensent d'un côté comme de l'autre. A la base de l'empire et à sa pointe.  
( Cocteau, op.cit., p.187 )
- 43)『堀口大學全集』、第 6 巻、290 頁、「コクトーの見た日本」。
- 44)同、290 頁。
- 45)同、290 頁。
- 46)同、290～291 頁。
- 47)田中穰『心淋しき巨人 東郷青児』、新潮社、昭和 58 年、96 頁。
- 48)宇野千代『或る男の断面』、講談社、昭和 59 年、37 頁。
- 49)コクトー 東郷訳『怖るべき子供たち』、角川書店、平成元年、174 頁。
- 50)『堀口大學全集』、第 6 巻、286 頁、「コクトーの見た日本」。
- 51) Mon bon ange,

Je me doutais que vous seriez étouffés sous les fleurs de pêcher et les paravents, puis dans les méandres de la queue du dragon et prisonniers des belles dames qui sont souvent à genoux et vous déposent les crevettes frites dans la bouche. Mais il y a au Japon une noblesse d'âme adorable et beaucoup de ce rêve que le monde moderne

refuse et s'acharne à confondre avec le sommeil. [...]

Je suis certain que le Japon va te donner un air frais, un grand coup d'éventail. Tâche de dire aux Japonais combien je les aime et combien je suis ému par leur gentillesse.

Je pense à toi chaque minute et je t'embrasse.

Jean

( Cocteau, J., *Lettres à Jean Marais*, Albin Michel, 1987, p.389. )

## 参考文献

( \*ただし本文、および注に明記したものをのぞく )

- ・ 『ジャン・コクトー全集』、東京創元社、昭和 62 年、第 5 巻「評論」
- ・ コクトー 『ジャン・マレーへの手紙』、東京創元社、平成 6 年
- ・ コクトー (東郷青児訳) 『怖るべき子供たち』、白水社、昭和 25 年
- ・ コクトー (佐藤朔訳) 『アメリカ紀行』、中央公論社、昭和 25 年
- ・ 工藤美代子 『黄昏の詩人 堀口大學とその父のこと』、マガジンハウス、平成 13 年
- ・ 佐藤朔他 『現代詩講座別巻 海外の詩』、創元社、昭和 25 年
- ・ 佐藤朔・白井浩司 『現代世界文学講座 6 現代フランス篇』、講談社、昭和 31 年
- ・ 佐藤朔 『近代詩人論』、理想社、昭和 46 年
- ・ 佐藤朔 『現代フランス文学の展望』、カルチャー出版社、昭和 51 年
- ・ 『林芙美子全集』、文泉堂出版、昭和 52 年、第 16 巻「年譜・著書目録」
- ・ 『新潮日本文学アルバム 34 林芙美子』、新潮社、平成 9 年
- ・ 柳澤健 『故人今人』、世界の日本社、昭和 24 年
- ・ 東郷青児 『私の履歴書』、日本経済新聞社、昭和 32 年
- ・ 東郷青児 『他言無用』、毎日新聞社、昭和 48 年
- ・ 東郷青児 『人間の記録 89 東郷青児』、日本図書センター、平成 11 年

**Abstract****The Visit of Jean Cocteau in Japan (5)****Masaya NISHIKAWA**

In May 1936, a French poet Jean Cocteau visited Japan on his journey around the world in 80 days. He stayed in Tokyo for five days, and during the stay, he is said to have met more than one hundred persons. Some of them were writers, some were poets, some were critics, and some were painters.

In this essay, I tried to examine the relation between Cocteau and Japanese artists, especially those who had a chance to see and talk with him in person. For example, Daigaku Horiguchi who guided Cocteau through Tokyo, was so fascinated by his works and by his character as to write many poems dedicated to him; while Fumiko Hayashi who presented some flowers to this French poet at the Kabuki-za-theater, would leave soon for China as if she had been inspired by Cocteau's trip around the world.